



Title	大阪大学看護学雑誌 15巻1号 新任特集
Author(s)	大石, ふみ子; 丸山, 美知子
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2009, 15(1), p. 61-62
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/56778">https://hdl.handle.net/11094/56778</a>
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 就任のご挨拶

平成 20 年 4 月 1 日付で総合ヘルスプロモーション科学講座の教授に就任しました。

私はこれまで、大阪については日本の保健師の歴史に数々の足跡を残してきた大阪の保健師活動に関心があり、また、公衆衛生院の学生時代に、当時、行政学部長であった橋本正巳先生から豊中保健所時代の活動をお聞きし、その時、先生が大阪大学出身であることを知りました。大阪の歴史的な公衆衛生活動の原点について、今後、教育や研究を通して探求し学生と共有していきたいと考えています。

私は新潟県で保健師、高校の養護教諭として 7 年間勤務致しましたが、住民主体の健康活動、町づくりに発展できないもどかしさを感じ、コミュニティワークを学ぶため、一念発起して国立公衆衛生院専攻科看護コース(1年間)に入学し勉強しました。卒業後は大阪出身の同級生の縁から日本看護協会卒後教育部の教員となって、会員の卒後研修に 5 年間携わることになりました。「ターミナルケア」「自立への援助」「地域看護」等のコースが今でも印象に残っています。研修生を通して全国の看護実践の現状や看護師の方々が抱えている課題、悩みなどから日本の看護を考える機会を得ました。また、当時の看護界のリーダーが、綺羅星のごとく講義やグループ学習に関わっておられましたので、直接、看護の考え方や卒後教育の実際についてご指導いただきました。このときの出会いは私の宝物です。

昭和 60 年、厚生省の看護課の保健師係長として採用され、平成 20 年 3 月まで勤務しました。医療行政、福祉行政、保健行政、さらに、研究職、教育職と幅広い経験を致しました。看護課では看護基礎教育や国家試験、カリキュラム改正、保健師の男子導入、訪問看護ステーションモデル事業の運営。社会局では初代介護技術専門官として介護福祉士の養成、日本介護福祉士会の設立準備。健康政策局計画課では保健指導専門官として地域保健法施行にともなう保健師活動、阪神淡路大震災での全国保健師支援活動など、配属部署の法施行、新たな制度づくり、事業実施、予算関連が主な仕事でした。

その後、国立公衆衛生院の公衆衛生看護学部室長に異動し、保健師の再教育および公衆衛生看護に関する研究をしました。地域保健法改正に伴い、「保健師に新たに求められる能力とそのための教育」を中心に研究をし、保健師の施策化に関する研究は現在も継続しております。

厚生労働省看護研修研究センターでは、全国の看護師等養成所の教員養成(1年間 定員 160 名)と看護教育に関する研究を行う機関ですが、管理者として勤務しました。ここでは「看護・医療における事故防止のための教育方法の開発に関する研究」に取り組みました。

大阪大学では、これまでの行政や教育での経験を活かし、地域看護に関する研究を中心に、取りくんでいきたいと思います。また、教育では保健所や保健師についてほとんど知らない学生に対して、地域や生活をとらえた地域看護が実践できるように、講義や演習・実習についても研究的に取り組んでいきたいと思います。

全てが初めてのことばかりですので、ご指導を宜しくお願い致します。

大阪大学大学院医学系研究科 保健学専攻 統合保健看護科学分野  
総合ヘルスプロモーション科学講座 教授 丸山 美知子

## 就任のご挨拶

このたび、大阪大学医学系研究科保健学専攻・がんプロフェッショナル養成プランに設けられた、がん看護専門看護師コースに赴任して参りました。私にとって、大阪はこれまで全くの異邦の地で、もちろん大阪大学とのご縁も新しいものです。ですが前任校である三重大学から引き続き、がん看護学に携われることをうれしく思っています。

今回大阪大学に設けられ、わたしが着任させていただいたがん看護専門看護師コースは、文部科学省のプロジェクトである「がんプロフェッショナル養成プラン」に基づくものですが、「がん看護」のように特定の疾患名が、大学における看護の一分野の名称に冠されるのはある意味例外的といえます。我が国の多くのがん看護の教育研究者と同様、私自身これまでは成人看護学の領域で教職に携わってきており、その中心としてがん看護が据えられる、というかたちになじんでいたため、「がん看護」のみを対象とするかたちの特殊さ（と幸運）を感じています。その一方、自分の臨床経験を振り返るとこれもむべなるかなという気もします。

基礎教育終了後、わたしの経験した臨床現場は大学病院の消化器外科病棟と泌尿器科病棟でした。ここでは少数の胆石症や虫垂炎あるいは泌尿器科結石や前立腺肥大など以外、ほとんどの患者さんの疾患ががんであり（もちろん糖尿病や循環器疾患をはじめとした既往歴は多彩でしたが）、いつしか新人看護師のわたしにとって患者さんががんであることは当たり前になり、次には自分や親しい人などを含め人間はみながんにかかって死んでゆくのだと確信するようになりました。その確信のまま、わたしは24才で自らががん保険の会社に電話して契約し、その3年後にがん看護を専門とする先生に師事するため大学院に入学しました。

その後様々な形でがん看護に関わり、それを研究テーマとしてきたわけですが、私は患者さんや家族の気持ち、考え、体験を直接聞くこと、それも時間をかけて本人のたどってきた道のりを一つ一つ反芻してもらいながら聞くことにより、何ものにも代え難い教えを受けたと感じています。厳しく過酷な状況におかれ、失望したり悲しんだり怒ったりを繰り返す患者さんや家族がいかにかんと、たとえ行き着く先が死であってもしぶとくしたたかに生き抜いているのか、には本当に驚かされます。未熟な人間として、私はどうしても自分自身を基準と中心において他者と向かい合ってしまうがちで、自分が看護をする、ケアを提供する、ということに夢中になってしまいましたが、自分ががんだ、と自覚して情緒的混乱の嵐を体験した患者さんは、どれほど弱々しく、時にお任せの態度に見えようとも、どこかに頑固なまでに「自分」をもっていて、時に「看護をしよう」とする私をはね除け、目を覚まさせてくれました。

がん看護においては、人は罹患したそのときから「がんサバイバー」とであるとされています。病を得て、それにもかかわらず日常を生きるたくましさをかいま見るたび、決して自分が主役にはならず、主体者でありサバイバーである人を支える「がん看護」を実践することの大切さを感じます。患者との信頼関係に基づくよいがん看護の実践には、基盤となる多くの知識や技術が必要であり、臨床第一線でのがん看護実践者となるがん看護専門看護師の教育、という仕事を大阪大学で与えられたことを光栄に思い、多くの皆様のお力を借りつつ、地道に努めて参りたいと存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

大阪大学医学系研究科保健学専攻

がん看護専門看護師コース 大石 ふみ子